

教育実習に関する現場教師との連携について

平山 許江・加藤 怜子*

Abstract

Students majoring pre-school education learn to understand kindergarten children directly when they are engaged in student teaching. At our university, students are sent for their teaching practice for two weeks in their junior year and another two weeks in their senior year. Since their practice period is very limited, it is important to prepare a good atmosphere for them to do the practice teaching at the kindergarten and to guide them well enough to practice student teaching. In this paper, as one attempt to make student practice successful, we discuss the communication between kindergarten teachers with whom students practice teaching and college teachers and the evaluation system or student teaching.

A Study of An Evaluation List Used to Evaluate Students Teachers

An list which is used by practicing teachers to evaluate student teachers work is crucial in helping to determine the student's future and profession. This paper's purposes are to discuss the former evaluation list and to create a new one. The results indicate that there are the four points of views used to evaluate a student teacher. They are as follows : (1 Direct teaching activities : A) To understand children B) To understand guiding, teaching, leading and helping C) Actual teaching), (2 Indirect teaching activities), (3 The makings of a teacher), (4 Teachers' views)

Key Words : Evaluation List, Practing teacher, To understand children, The makings of a teacher

Cooperation with Kindergarten Teachers for Student Teaching

* Motoe Hirayama • Reiko Kato

Correspondence Address : Department of Human Studies, Bunkyo Women's University,
1196 Kamekubo, Oimachi, Iruma-gun, Saitama 356-8533,
Japan.

Accepted October 18, 1999.

Published December 20, 1999.

I 章 教育実習園教師側の問題

はじめての教育実習生を受け入れるについて、大学と隣接するふじみ野幼稚園ではより良い実習を学生に体験させる為に教員のミーティングを重ねる。教員20名、園児、三歳児84名 4学級、四歳児127名 4学級、五歳児140名 5学級、計13学級 教員20名の構成である。

問題点

1. 4月より継続している内容や状態をその場だけでは理解し難い。
 2. 昨年度実習生は自由な服装だったので、広い園庭では保護者と見分けづらい。
 3. 経験年数の多い教師に対して、経験年数の少ない教師が、実習生に対して指導力が劣るのではないか。
 4. 9月中旬以降の実習は、運動会の練習等で主体的な幼児の活動が十分に理解できないのではないか。
 5. 評価の観点について、担任の主観が大きいため、これでよいのか。
1. の問題点に関して
園として、三歳児、四歳児、五歳児の観点とカリキュラムを質問に答えられるように準備しておく。毎日保育終了後対話による反省時間を担任と設ける。
 2. の問題点に関して
エプロン式服装を実習生に提供する。名札はそれぞれに考えて創る。
 3. の問題点に関して
教育の視点が同じなら、経験年数にかかわらず、学生にとって差し支えないのではないか。教師側も、実習期間中疑問や取り扱い上の問題があったとき、主任や園長、教師間で意見を交換し合うなどする。現在の自己レベルで最善をつくして、学生に理解してもらう。大学に依頼し全学級1名の実習生を受け入れる。
 4. の問題点に関して
実習期間のとり方は大学の授業の関係によるので致し方ない。しかし、運動会が行われる時期だから、子供の主体的な活動が損なわれると考えるのは的を射ていない。できるだけ子供自身主体的に意欲的に活動できるように援助していくべきである。
 5. の問題点に関して
大学教育実習担当の教師より評価について園教師の側の意見が聞かれる。これは第II章に述べられる。

ミーティングを重ねながら上記のような問題があげられ、満足ではないが了承の上で実習生

受け入れに臨んだ次第である。

実習生と教師との反省時の折についての問題、子供へのかかわり方・保育への理解、日誌(記録のとり方)その他は実習終了後のミーティングより考慮し、次回への研究資料として扱いたいと思う。

II章 教育実習における現場実習評価表の検討

1. 問題の所在

本学の教育実習は、人間学部保育心理専攻学生の幼稚園教諭1種免許状取得希望者を対象に3年、4年次のそれぞれ2週間の現場実習を含めて実施されている。平成9年に新設された本学部にとって、9年10年が編入生のみのごく限られた教育実習であったのに対し、平成11年からは人数的にもシラバスの上からも本格的な実施の運びとなる。

教育実習における現場実習の評価は、学生の実習成績を把握するという本来の目的と併せて、進路や就職選択などの将来の方向性を明確にするうえで重要な役割を果たしている。そのため、現場実習後の指導においては、この評価を中心にして個人面接等を行ない具体的でかつ直接的な指導にあてている。すなわち、自己課題の設定、関連科目の習熟の度合いなどを明らかにし、幼稚園教諭としての資質の向上を実質的に図っているのである。特に初年度の3年生実習に関しては、保育職としての適正の見極めや、課題解決のための計画などに影響を与えるため、その取り扱いが重要となる。つまり、単に単位数を満たしたかどうかではなく、2次の4年生実習に向けてのガイダンスとしての役割を担っている。特に充分成果が上がらなかった学生については、実習日誌やレポートなどとも関連させながら、必要に応じて追加実習、補正実習、レポート提出などの課題を設け、免許状取得に適した水準への引き上げを課している。

そのため現場実習の評価表は、こうした具体的で直接的な学習課題が把握できるものが求められる。そして同時にこうした本学の主旨が受け入れ先の実習園にとっても理解されたうえで評価に具現化されることが望まれる。これまでも現場の指導教員と大学側指導教員を一堂に会しての実習研究協議会を中心に意見を交換しあってきた。また、訪問指導の折に担当教員ないしは管理職の教員から直接記入上の問題点などを指摘いただくこともある。そのなかには、評価の主旨が曖昧になっていたり、現場実習の成績と単位との関連が充分理解されていないなど大学側としての責務に関するものもある。

以上のことから本稿では、短期大学で使用していた評価表をもとに問題点を整理し、人間学部保育心理専攻として新たな評価表を作成することを目的として、その検討を行なう。

2. 従前の評価表の検討

短期大学保育科において使用されていた評価表は、表1に示す通りである。これについての

実習園および大学実習担当教職員から提出された意見を整理するとおおよそ下記の通りである。個々の意見を徴収したため相反する意見が並列されていたり、実習園と大学と求める条件が互いに矛盾する場合もあるが、現状の問題を明らかにするため、それらも併せて述べてある。また、意見は現状の問題や疑問などを中心に列挙してある。

(1)実習期間・実習生名

本学で記入して実習園に送付しているが、実習期間については、依頼状に明記してある他、出勤簿でも確認できる。学籍番号等は学内の文書処理等に通用するものであって、実習園には利便性がない。

(2)実習園名・園長名・指導教諭名等

実習園名は既成の印が使用できるスペースがほしい。成績や出席簿等の最終確認は園長が行なっているので園長名だけにしてほしい。実習配当学級が複数にわたる場合は指導教諭が複数になり、「指導教諭氏名」欄に複数名が記入される場合もある。指導教諭は配当学級と対応しない場合もある。園の職員で協議を経て評価するので、指導教諭名は不要ではないか。園長か教諭かの職名よりも成績記入の責任者名でよいのではないか。

(3)評価項目

各項目の評価内容をどのように捉えているか、またどのような問題を感じるかを整理する。主な意見は下記の通りである。

言語について：実際の幼児とのかかわり、教職員とのかかわりにおいて、言葉遣いが乱暴な場合は減点している。あいさつ 敬語、声の大きさなどの適切性を対象に評価している。言語というより、言葉遣いのほうがよいのではないか。項目の1番目になっているということは重要性が高いということか。

態度について：実習への取り組み全般について積極性があるかどうかで判断している。反省会や指導案の打ち合わせなどで素直に指導を受け入れて守っているかなどを評価している。意欲的な態度で実習に臨むことが必要なので、どういう態度が必要かを明記したい。

研究心について：評価しにくい。不明として空欄のまま返却している場合もある。この項目は大学側が判断することであって、現場では研究的な姿勢は求めている。

理解について：指示の理解や作業を的確にしているかで評価している。幼児の発達の理解や子供の内面の理解など保育の基礎を求めている。保育全般にわたって、取り組みの姿勢や仕事内容などの理解を対象にしている。実習園が評価する項目ではないように思う。指導によって理解がよくなるわけではないので低い評価の実習生には厳しいのではないか。

協調性について：実習生が複数いる場合には実習生同士のかかわりについてが評価対象となるが、単独の場合評価しにくい。教職員との行動は協調性と言うよりも指示の理解や態度として判断しているので作業の分担や協力として捉えている。

生活指導について：食事、清掃などを率先して行なっているかどうかで評価している。実習生自身の服装や言葉の遣い方など生活態度がきちんとできているかどうかで評価している。自

〔表1〕

実習期間 自平成 年 月 日 実習幼稚園名 _____
 至平成 年 月 日
 保育科 年 組 番 園長先生氏名 _____ 印
 実習生氏名 _____ 指導教諭氏名 _____ 印

教育実習成績評価表

出席状況	出席日数	欠席日数	遅刻回数	早退回数	印
	日	日	回	回	
保育指導上	1. 言語		5 4 3 2 1	備考	
	2. 態度		-----		
	3. 研究心		-----		
	4. 理解		-----		
	5. 協調性		-----		
	6. 生活指導		-----		
	7. 子供の導き方		-----	総合評価	
環境整理	整頓美化に対する工夫		-----		
事務処理 (報告提出物)	確実さ		-----		
	迅速さ		-----		
総合所見					
.....					
.....					
.....					
.....					
.....					
.....					

由保育中心なので主に配慮を要する子への援助の様子で評価している。「環境美化に対する工夫」との区別が充分でない。

子供の導き方について：言葉掛けの適切性、個別の対応などで評価している。部分保育として担当した指導について導入やまとめを見る。一斉指導の手順や準備など幼児の前に実際に立つときの様子を評価している。

環境美化に関する工夫について：実習生としては、清掃などを指示に従って適切に行なうので充分である。あえて工夫をする必要はないのではないか。また、工夫を実現する機会はないので工夫までを要求して評価すると言うのであれば判断しにくい。

確実さについて：理解や研究心などと重なるので誠実さといった姿勢のみを評価して理解の質などは問わないようにしてはどうか。期限を守る。形式、枚数など指示にしたがっているかを見ているので、指示の遵守と捉えている。

迅速さについて：普通のレベルを以前よりも緩やかにしている。ほとんどの実習生が時間の使い方が悪く、正しく評価すると2や1になる。最終レベルで判断すると言うよりは初期の頃に比べて成長が見られたらよいとしている。時刻を指定してその範囲内で処理できるように指導しているが努力していればよいと考えている。

(4) 評定尺度

5の方がレベルが高く1が低いという確認ないしは問い合わせがときどきある。何もなければ3と考え、何かしら問題があれば減点し良い点があれば加点としている。よって3だから良いというよりは、持ち点が3として扱っている。その学年の実習生としてのレベルに達していれば5としている。できるだけ良い成績になるように特に問題がなければ5として問題があれば減点している。実習生が複数いる場合には相対評価を取り入れている。

(5) 備考

欠席や出席理由などの記載と考えている。台風のため休園になったときや忌引きなどがあった場合にのみ記入している。特記事項がある場合のみ記載している。何を記入するか分からない。

(6) 総合評価

未記入で返却している。各項目の素点を合計して平均点を出している。各項目の素点は絶対評価だが、総合評価は実習年度を考慮したり、項目のうち重要と思われるものの点数を加味して判断しているので、多少平均点とは異なる。各項目の素点に1や2がある場合には、不合格にならないように保留として総合評価は大学で判断してほしいとしている。

(7) 総合所見

実習生自身が読むことを想定して記述している。項目の評定の根拠となるようなことを文字で表現している。評価としては現れなかったこととして、初期の頃に比べて変わった点や今後の課題を記入している。大学側で今後配慮してほしいことを書いている。今回の実習で欠けていた点や教師として努力が必要な分野について触れている。

3. 試案予備調査

本学ふじみ野幼稚園教諭14名に試案を提示し自由に意見を記述してもらう。これは、ほとんどの教諭が短大保育科の評価表記入の経験があり、また日頃からの交流があるため連絡が密にとりやすい点から対象とした。多様かつ多数の意見が寄せられたのでできるだけ修正に反映した。そこで、ここでは今回の修正につなげなかったものについて検討結果を述べる。

(1)幼児の理解の内容として「一人ひとりの名前」があるが、2、3日で配当学級が変わるような場合は名前を覚えることは出来ず、評価が悪くなるのではないか。

{検討}配当学級が短期間で変わる場合は、指導教員もそうした実態の中での到達レベルで判断すると思われる。また、配当学級は固定することが望ましいので、研究協議会などの機会を利用して繰り返し配当学級の固定化の方向を依頼する。

(2)各項目の評定の1または4の場合は特記事項として記入するようになっているが、2や3でも判断をした理由を記入したほうがよいのではないか。

{検討}課題が何かを知ることが目的なので、手間をかけてもらっても生かせない。むしろ1の場合のみ記入するとしたほうが明確になると思われる。すべての実習園に学園付属園と同じ協力を仰ぐことは難しい。実習園の負担はできるだけ軽減する方向で進めたい。

(3)保育の実際には、クラス運営と個別指導の内容があったほうがよい。

{検討}2週間の実習期間では、指導教員より経営案を伝え聞いて、それに沿って実践するのが精一杯と思われる。また、実習園においてもそこまで実習生に任せることは少ないと思われる。また仮に任せられても実現できるものはごく限られた範囲であることから、実践の評価の対象からは除きたい。代わりに、指導の理解項目の中に指導計画やねらいの理解を盛り込むようにしたい。

(4)資質欄は記入者によって基準や考えが違うと思うが、それでよいのだろうか。

{検討}確かにこうした評価は主観的になりやすいが、それを踏まえてもなお実践の場でかわりをもった先輩教諭の判断は価値があると思われる。よって、評価記録に全面的に依拠するのではなく、事後指導において、学生の自己点検のための材料として「具体的な行動」を振り返るために利用するようにして、評価そのものは現状で実施したい。

(5)実習経験(実習年次)によって評価表を変えたほうがよいのではないか。

{検討}実習経験による実習内容の違いは、責任実習(1日実習)である。しかし、責任実習を単独に取り出して評価することは難しいと思われる。理由の第1は、責任実習と言っても、指導教員の援助をさまざまなかたちで受けながらやり遂げている現状がある。さらに、評価対象となる責任実習を現場へ依頼することは、過剰な負担となると判断される。よって、あくまでも責任実習は、実習園の裁量でさまざまな形態で実施してもらい、そのうえで現場部分参加や半日実習などとともに、保育の実際の項目で総合的に評価してもらうこととする。

4. 修正評価表(99年度版)作成の要点

従前の評価表の問題点およびふじみ野幼稚園教諭による試案に対する意見を考察し、99年度より実施する評価表を下記の観点から修正し使用することとする。具体的には表3に示す通りである。なお、今後も修正を加えていく予定なので、実習園用にはあくまでも文京女子大学人間学部「教育実習評価表」であるが、便宜上「教育実習評価表(99年度版)」と呼ぶこととする。修正の要点は下記に示す8点である。

(1)用紙サイズ

文書管理の都合により、諸手続き用紙および日誌などと同様にB5サイズをA4サイズに変更し、左綴じとする。

(2)評価表「記入の仕方」

評価表の記入の依頼と方法についての用紙を作成する。実際は表2に示す通りである。評価項目や基準などを添付し評価表と一緒に送付する。評価表の扱いの他、各項目の具体的内容を明示し、評価と同時に指導内容の理解も図ることとする。

(3)実習生、実習園

事務処理の軽減を図り、実習生名は学籍番号などは省き、実習園にとって必要な氏名のみに絞る。実習園名は同一のものがある。検索に不都合があるため大学側の利便性から住所欄を加える。住所印園名印などが使用できるようスペースを広くとる。

(4)記入者名

園長名、指導教諭の区別をなくし、記入の責任者の氏名と押印とする。実際には指導教諭が複数であることや合議で評価する場合などもあるが、具体的な処理は園に任せることとする。したがって、記入者名として柔軟な表現にする。

(5)出席状況

別紙に出勤簿があり、実習期間および検印欄があるので、これらは評価表より削除する。また、従来の備考欄が出席状況に関する記載に限られていたので、備考欄の内容をさらに明確にするため出席状況の枠内に位置づける。

(6)評定尺度と基準

実習園での成績は、教育実習の事後指導に反映するためのものである。つまり、大学側はもとより学生にとっても課題を明確に捉え、その後の学習における資質向上に役立てなくてはならない。したがって、評点を数値で表わすことが最終目標ではなく、あくまでも形成的評価としての把握ができるものが望まれる。そこで評定および基準の文言について下記のようにした。

まず、評定において「普通」という表現を避けた。実習の実態は、なんらかの問題をはらんでいるであろうし、各所で指導教員の援助を受けながらやり遂げる実態がおおかたの実勢の姿であり、言ってみれば「普通」であろう。そうした実態の中で、指導教員が実習生の実習経験や幼児の実態などを考慮して、現時点で要求されるレベルに達しているか否かを判断するものが適していると思われる。そこで「普通」の段階を削除し、あくまでも指導教員の良否の判断

〔表 2〕

教育実習評価表 記入のお願い

文京女子大学 人間学部
実習委員会

ご指導ありがとうございました。お手数をおかけしますが下記のような要領で記入をお願い致します。

本評価表は、今後の学生指導に反映いたします。この評価表を直接学生に見せることはありません。個人面接等で本人に助言する際の資料として活用させていただきます。

記入の仕方		
I 欄	幼児の理解	幼児の発達、遊び、生活などの理解 一人一人の名前、プロフィールなどの把握
	指導の理解	教諭の行動のよみとり、指導計画やねらいの理解 活動、個人に応じた援助の理解
	保育の実際	計画や教材準備、環境の構成 実際の援助技術、幼児とのかかわり
II 欄	園務の理解	清掃、環境整備、学級事務 行事・会議など保育終了後の園務に関する取り組みについて
III 欄	教諭としての資質	ご指導下さった先生の基準でご判断下さい。判断がつきがたい項目は、空欄のままかまいません。
IV 欄	所見 総合評価	ご自由にご記入下さい Dは再履修の必要がある場合、教諭として資質に問題があると判断された場合です。

が反映できるものにしたいのである。しかし、「良い・劣る」では、先に述べたように実習の実態とはそぐわないので幅をもたせて「だいたい良い」「やや劣る」とする。

また、さらにこれよりも良いレベルは「優れている」とした。一方さらに劣るレベルについては文言からは「非常に劣る」の表記が妥当となるだろうが、評定者にとってはこの表記は実習生の将来性や可能性を断ち切る印象を与え評定しにくいと思われる。そこで、形成的評価の視点から実態は「非常に劣る」のだが、角度を変えて「課題が多い」とする。

(7)評価内容

大きく4つの視点から構成した。第1は、直接的な保育活動欄である。すなわち幼児が受け

〔表3〕

文京女子大学 人間学部

教育実習評価表

実習園 住所・園名

実習生 _____

記入者名 _____

印 _____

出席状況	出勤日数	欠勤日数	遅刻回数	早退回数	備考		
	日	日	回	回			
			す ぐ れ て い る	だ い た い よ い	や や 劣 る	課 題 が お お い	特記事項 (1または4の場合は必ずご記入下さい)
I欄	幼児の理解		4	3	2	1	
	指導の理解		4	3	2	1	
	保育の実際		4	3	2	1	
II欄	園務の理解		4	3	2	1	
III欄	教諭としての資質 (判断しがたい時は無記入)		誠実さ				
	◎ ○ △ × す ○ や × ぐ ○ 良 や 非 れ ○ い や 常 て ○ い 問 問 い ○ る 題 題 る ○ 有 有 る ○ 問 問 る ○ 題 題 る ○ 有 有 る ○ 有 有		積極性				
			責任感				
			迅速さ				
			明朗性				
IV欄	—所見—						
			A—優 B—良	C—可 D—不可	総合 評価		

る教育課程に組み込まれた時間帯の保育業務である。下位項目として①幼児の理解、②指導の理解、③保育の実際を設けた。具体的内容については、表3に示す通りである。第2は、間接的な保育活動である。すなわち幼児が受ける教育課程を離れた時間帯の保育業務である。第3は、教諭としての資質欄である。すなわち社会人としてあるいは保育に携わる人として必要な資質である。第4は、所見欄である。上記のことがらを踏まえて総合的に、あるいは別途の評価の視点から自由に記述するものである。

(8)総合評価

4段階を設ける。出欠状況や教諭としての資質など視点として記述されなかったことも加味できるように、別紙「記入のお願い」のなかで主旨を説明する。またD判定については、「不可」の他に「再履修の必要がある場合」と形成的評価の性質を印象づける文言を添える。

5. 今後の課題

99年9月現在、約150の実習園に「教育実習評価表(99年度版)」が配布されている。すべての園から回収されるのは10月末の予定である。記入後の意見を幅広く収集し、問題のありかを考察し改善を図りたい。特に短期大学保育科のときから継続して実習を引き受けてくれている実習園については、改善の主旨に沿ったものになっているか、さらに改良すべき点がないかなど連絡を密にとって意見を頂戴する予定である。また、協議制をとって評価している園を対象に、意見調整に時間がかかったり、判断の不一致が見られた項目などを明らかにし、必要なら評価内容の補足をしていきたい。学園付属の両幼稚園の方々には、質問紙等によって、評価内容や記載の問題など詳細にわたった意見収集を図りたい。こうした過程を繰り返すことによって修正を重ねていきたい。

また、実習生の評価結果は、一方では教育実習ならびに関連科目の授業評価でもある。今回は評価表を中心に検討を行なったが、今後はシラバスを含めた授業の検討も併せて行なっていきたいと考えている。

